



【巻頭言】

「エレクトロニクスソサイエティの抱える課題を考える」 (エレクトロニクスソサイエティ会長)

津田 裕之 (慶應義塾大学)



昨年度、電子情報通信学会エレクトロニクスソサイエティの次期会長に選出いただき、今年度は、同ソサイエティの会長を務めます慶應義塾大学の津田裕之と申します。学会が、益々会員の皆様に役立つものとなるように運営委員会の皆様と共に努力して参ります。引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、今年は、予期せぬコロナ禍により、学会活動はもとより全ての社会活動が制約を受け、皆様の日々の生活が大きく変化していることと思います。電子情報通信学会の春の総合大会が中止になり、秋のソサイエティ大会もオンライン開催が決まっています。国際会議も軒並みオンライン開催となりました。また、組織によっては、特に、大学では、研究実施場所へ入構できず実験もままならない状況にあります。オンライン開催としても実験中心の研究では、発表する内容がなくなるなど厳しい状況になっています。一方、半ば強制的に行われているオンラインの研究会では、オフレコの議論はできませんが、参加人数が大幅に増えたり、Chat 機能を活用して今まで以上に議論できたりという話も伺っています。安心な状況になるまで、しばらくかかると思いますが、皆で知恵を出し合ってこの局面を乗り越えたいと思います。

コロナ禍は、いずれ克服されると思いますが、電子情報通信学会は幾つかの難しい課題を抱えています。第一の課題は、会員数を増やすことです。これに対して、電子情報通信学会ではプラチナクラブを立ち上げ、現役を引退した皆様にも活動の場を提供しています。また、ジュニア会員制度を立ち上げました。少子化の影響が今後数十年続くことは、避けられないことですが、会員数減少の要因はそれだけではありません。企業にお勤めの会員の人数が特に減少していることから、エレクトロニクス分野・産業の問題が背景にあることが分かります。エレクトロニクスソサイエティとして、エレクトロニクスの分野を盛り上げて、研究→開発→市場展開→研究のループを加速していく手助けをすることで、集う仲間を増やしていかなければなりません。また、所属する組織に置かれましても、学会に参加

する意義を広めて頂きたいと思います。これは、皆様一人一人の頑張りに依存していることと思います。“エレクトロニクス”の概念を時代に合わせて変化させ、研究会活動もフレキシブルに成長分野を取り込んでいく、あるいは、我々が作り出していく、ことが求められています。

第二の課題は、論文誌の IF 向上、投稿数の増大です。エレクトロニクスソサイエティにおいては、Electronics Express を立ち上げ、多くの論文を集めることに成功しています。しかしながら、IF を大きくしないと、世界の論文誌の中の位置づけが低位になり、投稿先として選ばれなくなってしまいます。テクニカルな方法での IF 向上策は、既にほとんど行っています。次の段階は、我々会員が、エレクトロニクスソサイエティ、電子情報通信学会をサポートするため、我々の発行する論文誌を投稿先として選ぶことではないでしょうか。また、以前もニュースレター上で述べましたが、和文論文誌は、日本語の価値を高めるために、維持すべきと思います。IF 以外のインセンティブを考えていくことが必要と思います。

第三の課題は、国際化です。これは、我々の中で、特に、日本人会員の中で、何が望ましいのか熟慮すべきことが多く含まれています。個人で、あるいは、企業や大学においてもグローバル化のかけ声の下、国際連携、留学、外国への進出、あるいは、外国からの人や資本の受け入れを行ってきました。そのような背景の下、一層の国際化が可能な素地はできていますが、戦略的に行わなければ、労多くして功少なとなりそうです。外交において米国や中国などの大国に対して難しい立ち位置にいることの縮図でありますが、母語が世界的にはマイナーであり、技術的・経済的なプレゼンスが低下する中で、どのように活路を見だしていくか、各自で考えて行動すべきと思います。

会員の皆様におきましても、この様な観点から、エレクトロニクスソサイエティと電子情報通信学会の課題についてご検討頂き、身近な行動に反映させるよう、お願い致します。また、会員の皆様からご意見がありましたら、是非、頂戴したいと思います。

著者略歴：

1985年早稲田大学理工学部物理学科卒業、1987年東京工業大学総合理工学研究科物理情報工学専攻修了、同年日本電信電話株式会社入社。光信号処理素子の研究、10Gbps伝送システムの研究開発に従事。2000年慶應義塾大学理工学部電子工学科専任講師、2001年同助教授、2007年同教授、2018年 University College London 訪問教授、2020年慶應義塾大学理工学部電気情報工学科教授で現在に至る。光通信用機能素子、光計測用機能素子、光通信システムの

研究に従事。2006-07年 ELEX 編集幹事、2008-09年エレクトロニクスソサイエティ編集出版会議庶務幹事、2012年レーザ・量子エレクトロニクス研究専門委員会委員長、2012-2013年和文論文誌(C)編集委員会委員長、2017-2018年エレクトロニクスソサイエティ副会長(編集出版担当)、2019年エレクトロニクスソサイエティ次期会長(兼研究技術担当副会長)、2020年エレクトロニクスソサイエティ会長、本会シニア会員。